

## 元気が出た埼玉・協同研究会の合宿講座

増田 アツミ (埼玉生活文化・地域協同研究会)

### 武甲山に見守られて

6月11・12日、埼玉県横瀬町で埼玉生活文化・地域協同研究会が主催して合宿講座が行われました。横瀬町は、秩父盆地の南の入り口に当たる正丸峠を越えてすぐのところにあり、秩父のシンボルである武甲山が町を守るようにそびえ立っています。協同研究会は農業体験学習「野の文化学習会」などを通じて、町の住民と交流を深めてきたところでもあります。合宿の会場は、秩父の礼所のひとつである語歌堂の近くの民宿「ごかばし(語歌橋)」。

募集の段階では、泊まり込みということもあり、しかも秩父での「学習会」ということで、ちょっと出足が悪く参加者が集まらなかったらどうしようといった事務局の心配は、当日一気に吹き飛んだ。

県外からは、長野県伊那谷を活動拠点にする「田楽座」の松田さん、栃木県の地域事業団の佐藤さん、横浜から協同総研理事長の黒川さん(慶応大名誉教授)などが参加された。ILO事務局にいた横浜在住の荻野目さんはスケッチ旅行をかねて、デイパックにスニーカーといういで立ちで現れた。埼玉県勢は、「菊地組」「増田組」ともいう協同研究会のメンバーを中心に総計25人が参加した。

各地で新しい協同の取り組みが動きだしているが、埼玉でも従来からあった消費生協、医療生協、学童保育運動、親子劇場などのほかに、地域環境保全のためのトトロのふるさと基金の運動、子育て協同などの教育文化運動、地域福祉や障害者の共同作業所づくり、新しい働き方をめざす労働者協同組合(事業団)運動が新しい広がりを見せています。

食べ物やくらし、社会サービスや文化・教育な

どすべてにわたって、地域の人々が主人公になり、人間らしく生きられる地域作りの協同運動と事業がネットワーク化されることが、強く求められています。

### 盛りだくさんな4つの報告

今回の合宿講座では、こうした実践から学び、また相互交流を深めて、地域における協同の可能性を探ろうという目的をもって、次の4つの報告をお願いしました。

①生産者とともに考え作る産直に取り組んでいる「食を考える会・のびる」代表の早坂由美子さんは、これまでの生協の産直への疑問から出発し、本当の意味で農業と生活を守る産直運動を、協同組合方式で作り出そうと活動してきた経験を報告しました。現在、埼玉中心に会員は150名で産直食材の共同購入を行っているほか、店舗を6店展開している。「食料基本法」「有機農業促進基本法」などの制度要求にも取り組んでいるが、事業と運動の統一をどう実現するかで大いに悩んでいるとのこと。

②東京・昭島に東都生協との協同で「リサイクル洗びんセンター」を作った共同作業所全国連絡会の菅井真さんは、共作連の歴史に触れながら、





洗びんセンターづくりとその運営の苦勞談を具体的に話され、参加者の関心と共感を呼びました。

洗びんセンターは、第一に環境事業での障害者の働く場を作ったという点で画期的な取り組みでした。第二に生協との提携の新しい水準と経験を切り開いたという点でも大きな意義のある取り組みでした。現在60の生協と200の共同作業所の間で提携が進んでいるが、その中でも最も新しい経験として各地の生協や作業所から熱い注目を浴びています。第三に、障害者の所得保障という点でも新しい経験をつくりだしています。センターでは全国平均7000円をはるかに上回る月額5万円の給与を支払っていますが、これを可能にしたのは生協の支援による自前の事業であることと、機械設備の導入でした。経営的努力も不可欠です。第四に障害の種別を超える初めての実践という点でも大きな意義をもっていきます。

③栃木事業団の佐藤賢二専務理事は、もともとは菅井さんと同じ共同作業所で働いていた仲間でした。彼は同じ作業所で働いていた同僚とともに障害者の自立的な働く場づくりをめざして独立し、栃木コープの小野専務の協力を得て事業団を設立したのでした。栃木事業団は企業組合資格を取得しましたが、栃木では企業組合の設立は10数年来絶えてなかったことから、県中央会が手取り足取りめんどうを見てくれたそうです。そんなこともあって、事業団は中央会の助成制度を積極的に活用し、昨年度は「活路開拓指導事業ビジョン実現化事業」の450万円の補助金を得て、協同総研の強力な指導・援助もうけて、ヘルパー養成講座、講演会、「答申」づくりに取り組みました。この経験をもとに、「福祉と協同の里」構想の実現に一層奮闘する力強い決意には参加者一同大いに励まされたものでした。

④協同総研の手島繁一さんは、全日自労という労働組合から事業団へ、さらに労働者協同組合へと発展してきた運動の経験に触れながら、「自立、協同、愛」「徹底民主主義」「全組合員経営」「労働者が企業の主人公」などのキーワードがあらゆる協同の運動と事業、組織によって共有されるべ

きではないかと、問題提起をしました。そのうえで、ヨーロッパの生協と日本の生協との比較、生協運動の問題点と課題、協同組合間のネットワークのありかた、内橋克人さんが日本経済新聞の5月15日、22日の二回にわたって書かれた「共生の大地—もうひとつの経済が始まる」という記事の中でも紹介されている「ヒューマンインターフェイス」分野における新しい事業・経済主体の可能性などについて、アドバイスがありました。

### 交流会や「黒豚」見学

夜の交流会には、地元横瀬町から、町役場振興課に勤める武藤さん、宇根地区で農業を営む「農民詩人」の八木原さん、元高校教師で現在は豚の屎尿を利用した循環型農業・畜産に取り組んでいる関根さんらが、差し入れの地酒をもって参加してくれました。部屋に下がってからも日頃できない楽しい交流が深夜2時まで続いたとか。

二日目の午後には、宇根地区の見学に繰り出しました。関根さんは今注目のEM菌のそもそもの発案者で、豚の排泄物を循環型で利用するシステムを開発して「秩父黒豚」を飼育しています。傾斜地を巧みに利用し、農薬などを一切使わず生態系に徹底的に依拠する飼育システムには皆大変驚いたようです。

八木原さんの田圃2枚をお借りして協同研究会が行っている「野の文化学習会」は、今年はEM菌を使った米作りに挑戦していますが、ついこの間植え付けた苗は順調に育っていました。ここでは、今や関東地区ではめったに見られなくなった「カブトエビ」を発見、参加者は子どものようにはしゃぎ回っていました。

ともあれ、こうして盛り上がった合宿講座でしたが、この日の成功を今後計画している「今、協同を問う埼玉集会（仮称）」にうまくつなげていけるよう頑張る気持ちがわいてきた二日間でした。